

現前性を巡る係争点

太田紘史 (Koji Ota)

東京大学大学院総合文化研究科

知覚経験がある種の心的表象だとしても、それは意識的信念のような認知的経験と異なり、その対象を現前するものとして我々に把握させる。このような現前性という現象学的性格は、どのように理解されるべきだろうか。今回のワークショップでは、現前性の現象学的本性と機能的本性が中心的な係争点となる。これらの係争点を考察することを通じて、現前性は表象的な性格として理解できると提案したい。

第一の係争点は、現前性がその現象学的本性として、どのようなカテゴリーに及ぶのかという問題である。物体の色や形のうち知覚者側に向けられている部分は、もちろん知覚的に現前すると言えるだろうが、では他の物体によって隠された部分もまた知覚的に現前しているのだろうか。一部の考えによれば、我々はそれを推論し認知的に経験しているのではなく、またそれを知覚的イメージとして経験しているのでもなく、まさにその部分を知覚的に現前したものとして経験している。これが、いわゆる非感性完結化の現象学的本性に他ならない。その主要な根拠は、非感性的完結化が、内容制約、刺激駆動性、空間的定位といった、知覚に典型的な制約を持つことであるという。

そうだとすると、知覚経験に特有の現象学的性格としての現前性は、ある種の表象的性格として理解することができる。さらにその表象的性格は、度合を許す問題だと考えることができる。例えば、大学内の研究室の前にまでたどり着いたとき、そこにいつも通りにあの同僚がいるだろうと考えるような場面がある。これは明らかに認知的な現象であるが、しかしそれは、先ほどと同様の制約を相対的に緩やかな形で持っている。他方で逆に、物体の隠されていない部分の色や形は、より強い制約のもとで表象されていると言える。我々の（いわば）標準的な視覚経験は、物理的刺激と光学的環境を契機として生じ（刺激駆動性）、その色・形や位置を恣意的に変化させることができない（内容制約と空間的定位）。非感性的完結化は、このような知覚経験と認知的経験の間の中間的な事例として位置づけられる。

第二の係争点は、現前性がどのような機能的な本性を有するのかという問題である。もっともらしい一つの見方は、知覚的に経験されるものは、認知的に経験されるものと違って、経験主体による行為を促し導くようなものだという考えである。我々は、現前しないものに向けて手を伸ばそうとはしない。この単純な事実から示唆されるのは、現前性とは他でもなく知覚対象に対する行為を導くことに関わっており、そしてそれゆえ自己中心的な参照枠という表象的性格に必然的に結びついているという考えである。だが正確に言えば、行為誘導性と自己中心的参照枠のうち、知覚経験にとって本質的であるのは後者であると思われる。行為誘導性は自己中心的参照枠を前提としているのであって、その逆ではない。実際、行為誘導に関わらない視覚神経経路に

も、自己中心的参照枠の表象を見いだすことができる。

そうであれば、現前性はやはり表象的なものとして理解することができる。そしてそうであれば、経験において経験対象が現前するか否かという二分法的な見方は不適切であると思われる。というのも、視覚的神経表象に見られるように、低レベルから高レベルへの表象変換は漸次的に行われるのであり、仮に中間レベルが知覚経験の自己中心的参照枠にとって主要な役割を果たすとしても、それは他のレベルとの明確な境界を持つものではないからである。

知覚経験はある種の表象であるという見解は、現前性という現象学的性格に基づいた反論を受けることがあるかもしれない。しかし、少なくともその現象学的性格は表象的に理解でき、その種の反論は退けることができるように思われる。さらに、もしも現前性を表象的性格として理解するならば、それはある種の表象的性格のクラスターとして、かつ程度を許す表象的性格として、理解されるべきだろう。知覚経験の現象学的性格は様々な奇妙さを含んでいるが、少なくともその一部は科学的探求とともに解明していくことができる——現前性はまさにそのように期待できる一例であろう。